描々道人稿

鋸山玉石異訓 初編上

岡丈記操觚

A 558
1

勤文堂

客歳の晩夏猫々道人魯翁曽て筑と房總二州に曳き暑を鋸山の霊場に避るの日偶然一樵夫より聴得し此物語りハ其趣意克く勧懲の道に悃ひ且近世の一奇談なるものゝ魯翁遂て帰京の後玉石異聞の名を設けて伊呂波紙上に号を嗣ぎ陸續登録せしも八十四の長きに至り其稿未ざ全くゝねど猶看客の曷采ハ愈高く響しより書肆の主個勧文堂そと小冊稗史よりのぜんと屢魯翁に請ふ折ゝ魯翁机邊の繁劇餘り即ち迂生にあれと托して操觚しめし初編の一帙素来本記の拔萃にて幸も愚夷と交へざれば標題も其儘一字を換へ玉石異訓と斯い号けつ

明治十五年十二月

岡丈紀識

48-7733

長我部
幸藏

幸藏その子分等
新堀村の賭場にて
捕縛せらる

鋸山玉石異訓初編巻上

東京　猫々道人原稿

岡　犬紀操觚

○第一回

抑安房の國平郡保田の郷元名村なる鋸山の神亀元年行基菩薩の草創なりそ人漬道を開きー以降茲ヨ一千二百餘年連峯峩々たるヨ繁茂たり故ハ里俗ハ是ヲ擬へてその山名ヨ稱号ヲ又此

山の巖石に自然佛体名歌の形象をなす半恰も人造の巧をなすに異なかれば真實に奇異の霊験なりとて安永年中円覚禪寺の住僧尚山帰依の信者に勧めて石像の羅漢数体を窟に附せしむるに安政のたゞまで經歴九十餘年間九十山中の岩窟の中に安置なしたる佛像の負数い一千二百餘体に到れど拾年を經て石像の位者なんどの缺なるを新規石匠に造刻し再建せる者多き中に上総の國茂原上町の石匠

天城民蔵と云る者その生國は伊豆の函南郷の石工の一男にして幼年時より父に習ひ一業を文覈ぎ經日言山嶮嶽の危険事業に拘せーゲその年齢二十一二の頃繰に繋ぐ魂の緒絃刻むに等し石工業の最悲しと覺るより迫属父母も世を去て同胞とても亦なし兄の心中安しと僅少の地所絶戚に付死ち石壁の紀已と煙りて上絶の茂原に絶縁きもど渠者疾に共地を去り他國に行しときくもの今は行く

活計の方便なれば石鑿の業たる業りて那首遠
首と名間取り紙素をうち尚所の石面鑿素多七が
大石塔の文員よその職工を需むるよ亦遠宿の主
個が活しと関くと苦しく訪ね紛れ備徳と身の
上の所因あたを憑をつく是より與七が祥工雇ハ且
養職業の間帳ふも庖厨を操られ炊きを助け茶
事ふ心を用ゆるよその妻お婦の乳ふ恒ひ文員事業
の果たる後もお婦が推挙よいよく首尾よく茅ふ同

撰ふ仕へしも逸一年と過ぎるとよ主個與七ハ氏義
が最老実なる心中よ感ず一隣の請力と憑みける
然るよ與七の先妻よ玉吉とふ一遺児ふり年齢又
歳の時その妻身故り後の妻を迎ふるよ継子あり
てハ支掃中の睦しくぬ基ひなれば一先が主従
里児ふ出もこそ家事の和熟可らんめれと他人
の勧めふ玉吉を同図冨津の浦色ふる漁師の庫
ふ里児ふ出しを後が婦を迎へ娶り後妻となし

るい即ち安政五年の春にて當時既七十三十六歳
お勝い二十五歳ありしとぞ抑此お勝といへるいその仮
名江戸新橋金六町（四谷里俗より伝来新橋といへり）にて三筋の糸より世と
渡る藝妓営業の柳挑者ありしが夕顔糸ふ産業出
もたの用くのかけ流し定めし孫たる客の中より上総
屋の細元とりまて武蔵屋幸義といへる者より是は屋
の割烹楼なりうるかの幸蔵が挙動上
俗洗りの他接ハなほど衣服の装飾懐中物まで行

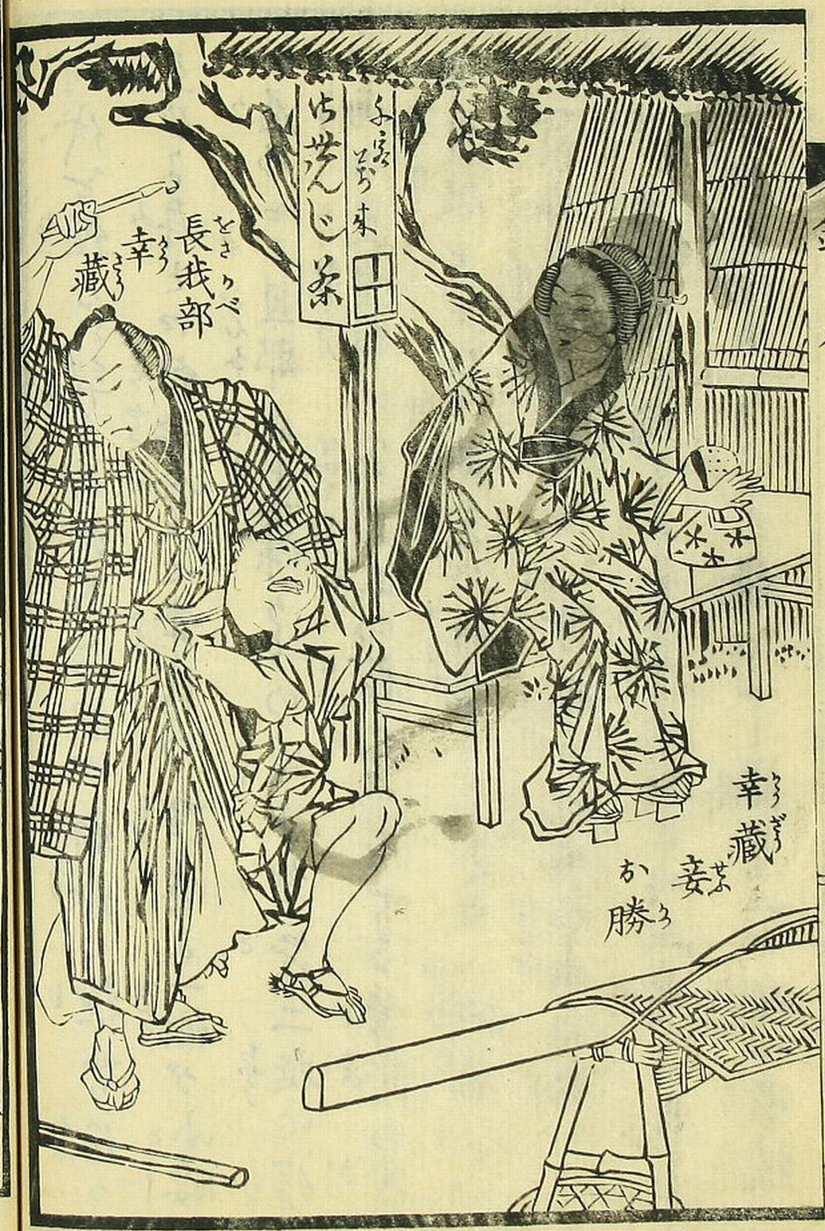
涉りたる贅沢好き經費の莫金も平生の常より優りて
遣ひしらべ傾き易き性ひ女の深たる思ひより誘引
水いるみもやらで打解しその疾を初め聖因も遠
出遊山と揚屋より心中の表裏とかうしてお勝い是
既老母ふも告ての後の活しかより幸義が出奔中ハ
毎月歳千欲雇費を出してお勝が体と寄宿と定
め爾来江戸より出る客まへ必ず此家より止宿りしが
お勝も好き幸義の助援よりて活計のうち自

経勤の藝妓稼ぎよ忌憚なく酒席に強て纏綿り咽る
変さ人多くるよかの華為が出射中に他の客の聘ぎ
よ魚ぜぞ務を自由の男識よ乳癌のか務と綽号
も高く一年係りと過ぎ乞ち老母も迫寄身敢りて
憑ととなるべき親属もなれべか務に一國よ幸
義と自己が所支と思ひ法め今に藝妓の営業も和
雲く寧を上総の果ふもの是好を妓郷よ連行て糸
操源りの業ありとも永慢し後に今ぬ変に成る生

ときよと幸義よ屢に解き迫るあぞ終べ藝妓の
営業と慶め此組居と賣掛ひて上総へ体ひ行べれ
ど我家よ本妻なれば其近色よ別家を造りを処よ
和女と組いまべしと相談変よ怒ひて安政二年の十
月初旬終よ居別し組所と離是懇意の方へもそれ
ぐよ告別して小網町なる本更渕河岸より廣松
よ乗込を上総の地方よ出帆せしが順風形合さ最
よくてその翌朝本更渕の浜辺よ松の長くや居幸

蒙いか傷と速ぐち陸より里所より出で或旅籠屋より
出だし懇ひく朝餐の支度を整へて此処より二挺
の駕籠と雇ひ中の一夜い途中より宿りて日光の山
色那とる道路の傳へへの立場茶屋より舁丈等が
息杖を休めて汗と拭ふまで幸蒙か傷も駕籠と
たち出で等しく茶屋より腰うち懸け烟草薫らも
身の衣裝粗郷めく婦女の通連い尋常の丈婦の
旅装ぶ江戸風俗い用意ろ藝妓脱りとえうけさ山

酒代を延るい舁丈の附目と但個ず偷眼と視ず行う
互ひよ身とに私語合ふて幸蒙の産色より一個が小腰
を屈めモシ旦那木更津うの通し駕籠二挺で僅
一両の丈賃使い定得宏の旅店へたてる営業の義
理賃仮ずけい但池色の保徳よしくも一個茶金一
分でい女房や孩児のにが糊されぬ行卒但個へ一
分で酒代をお頼ふまをしまたとうふ尾より屬く
狂うの三個も等しく猪をさ一ッ処へ寄蘿


名所
ちゃんじ茶
長我部
幸藏
幸藏
妾
お勝

幸藏茶店を
舁夫の強迫を
怒つて四人を
懲ーむ

とべ幸蔵侍への一次吹よ煙管の火四を搬と打ちコ
壮丈亢旅宿クラ定めて駕籠と途中で徑る酒代
と同ド亜陪い船い拐頻自已も上総ガ生国で高麗開
の江戸通ひよ年中往来ふ此街道駕籠の外酒
代と出せい云ぢと此方も知ッてカるガ教程ッくら
と手方ク言を切られて測しいわ人仮令婦人と連
やうガ追人と怖グる亡命や相乳ゐ者の旅でいわ人
先と急グね巳又里の路程此處ラ下て歩行ても大

寺い移人ガ其代り此場の始末を本更津の旅宿人巌く
終じく書ると駕籠よ入ると荷物と紅出し再び京
屋だけをひきたるぞ舁丈芸い多勢を憑ふ衆にく
よ罵詈ッて男女を中よ取巻た喧嘩おみの猿
藉よ幸蔵最ちや堪へうね熱たる床机と衝と立
上り煙管の雁首ふて一個の舁丈の肩間を強と
撲付れバ吁と叫びく額を歴へ退く背後ようこ個
ガ同業の仇覚えてカよと名自息杖ゐよ振あげ壬

二、世三よ打ちみたり苗沛幸義思ふやう敵を八を逢
き舁夫の四個よ味方ハ咱一個殊よ婦人の足を纏ひ
尋常るてい汚ぐよ難しと腰よ帯たる羽環造の行中
刀をさらりと引抜き驍ふて打込む息杖の中心戎両
断よ切落し除まる及頭が一個の舁夫の肩よ薄りく
為傷と負ハまよ云甲斐もあた舁夫共ハ流る鮮血
よ驚き慌忙駕籠うち棄て我先と足とをうよ遁
亡ろ此打か務ハ茶店の老媼と共よ避たる林の蔭

よ身を戦慄して居たりーが斯と見るより立戻り先
幸義ゲ恙ゲ恙ゲと祝しくるやう彼奴多くの
黨と集へく今仇報よ来るも恐れ極べ疾く此処を
退きて喧嘩の難を避けめ人とお務ゲ勧めよ幸義も
實よ道理と心中よ點頭やゲて氣干狭懐中より茶
代と出して老媼よ與へ自ら行裏を府ようち懸け
崖より幸義お務の二個ハ足を早めて漸と水星隊り
の道程と山色村ちで辿行く初已の家を訪ふ打しる

最茶遁亡たる舁夫芸八を負と称し二個ゞ再び得物
を多く引提げ男女の跡を追来りて富家の門よりたち
誇り痴傷と負ひたる用業の者の仇の旅人六郎よ
出よと問く騒動を主個ゞ図付け奥の方より立出
るゞ今幸義とち勝の二個よ換授まるも緯急な
れば唯睥睨よ打視やりて戸外よ駆出し舁夫芸がその
狼籍を止んとまるよ一個いかゝ孫子知己の者と思し
く声とりけ推うと思へば未更洋の仁右郎なるう顕相

変へ用業を集へく自己ゞ家の来客よ喧嘩を去
うけるとへ如何しく理由ゝ為芸て語せば悪くい扱
くへぬと云ふく仁右郎沖巻の多賦とうて背後
なる二個の用業ようち對ひ勘次も義助も未ぐ
知ゝ知ゝ此お人へ安房上総よ名高い賭博芸の
親分孫金吾の倫ゑ郎といつへ方寧茅茅を適宜
やうよ方委任まるとまゞ此方も僥倖方稼ぎいへ
うと互ひの顰頭術その始末へ箇換くと駕籠資

酒代を出さぬ酒癖募りて旅人が一個の同業
重右の肩先を疵傷を負せ丈より弟よ此勘次い眉
間を煙管で撲破ら是迄この通り血塗れの遺恨の
仇を報さんと跡を慕ひ尚家が親分の住居とは爰
さっさっぬ狼藉い憲兵の人と仁右衛門二個も
詳しくうち御辞るよ条ふ弟い委細成皮き重右と
やらが疵傷い充よう勘次が怪我の療治料も呑ゲを
べく兼婚ぶれば仁右衛門是ゆよ迷惑い激産骨灰うみ

ぬ〻〻此村外れの安旅宿楽屋で暫時待てくれと遺
金谷の一云よそんるう親分頼を外と初めの勝ひ行
変へやら消て二個の舁丈を弟へ宥しくうち連れ村外
れる楽屋の旅宿るぞ都元くる

○第二回

當時五個の島丈弟ハ舁丈共ゲ立去し孫音送りて
幸義とお縁の二個を奥間へ迎へ子分と思し元者く
吟味茶を勧め點心を出して食表なゲ〻一別以来の

に徊を演べさて貴兄まへ婦人を連て何変ようの色
彩ぞと問まて幸義莞爾と笑ひ張て湧たる彩絵うう
兄弟分の厄難よりて今更大人気あり我等の経歴へ
面目なれど舅夫芸ゞ婦女連と偏蔑まゞての強
迫ゞ痛よ障りて双物三昧仮令宿の者みも何也
渠等よ疵傷を負せしうへい利を犯よ隔を分の過
ちその業用い幾千でも適宜ゆう奨へく内涙を軽
むとりみよ急ゆ弟も委細を水猪との繹の為義まで

いえゞうくも我まの寓舎よ逗留何也と止めく二
個の子分を引連まかの舅夫等ゞ寄り居る様子を
さゝく出ゞ跡よお務い急ゆ弟の留守を喪ひ幸義
ゞ勝の為りよさゝ寄なゞう声を激めて問ひ乞る
やう今改めて関でいなれど且恥い上総の網元と
承知ゝ分めの上と客ふの変つさ此場の仕様とての
主個い衰意通家のよへ彩仮と素せゝふその新仮
ゞ兄弟分と且恥をさゝていゆうい若敬貴弟もか

同業の有書のかるか方でいかゝなるさりしゝと星と指たるか勝ゞ雖よ幸義ハ冷笑ひして徐さて亜一附る烟草と一口吸ひてオ、能祭しさ咱の牙の上鋼元様ハ親父の代上総生れの活動も猿児の時より務負好演色の物の完布ゝゝ陸の畠の小丁宇親父の金銭盗出し市場博奕の蛮蕊より逐ハ親の勘当ハ考陸巳りや上物の長依義の銭布拵布緒の草鞋で小野伝濃銭後色をかし巳り

命と腕を切よゝ危険冒嘩も此方の業術左ゝり右ゝ人みも知られ故郷ゝ近き長我部の里ゝ帰りて上総一国博奕の場所の賭徳ゝ長我部の幸義と尚ホゝて少考陸色でも少しハ知られと表意道家の生場り海の色情ゝ憑藻まて別深を重ねさ暁ゝ一所ゝ連てと知色ゝ江戸を拵つさ上総行今まで霞つさ賭業の化の皮ゝ露顕てハ定めし色想ゝ色さらり然し鬼神ゝ模倣ゝ連海ハ情ゝ

異りいれんと云まてお勝いれ敷ちゆ縄やり一端整つ
さ二個ゞ中後令鬼でも蛇へかろう貴郎四本ゑ
如何やうな若親も厭ゝ妻ゞ心中仇幸恨結と思
つくおくれと莞爾笑ふ幸義いその子負ゑ
妻い離縁まるとと看棄いせねと密く語ふ形しもいれ
尚家のゝ主個爲又弟ハ子分共倶たち功りさて幸義
ま絡るやう先刻ま旅宿ま法せ亜ろかの仁左郎ま
要細と続ト童右勅次の二個ゞ疵傷の業用ま尚ま金

又両を渠等ま與へて内海の書面ま机中押せたりと
取出ま又紙一枚と幸義ハ見をそりて爲ま弟がその
中義の名数をかぞらひ立換の金負を返却て子分
等ハ土産ありとて歳平銭の黄白を與へつ幸義ハ
此家ま止宿て主個と酒敬換ト翌日出立るさんと
まるま爲ま弟ハ更ろ前ま二挺の駕籠を整へあた
幸義ハ勝と勧めて示らしゝ子分の者ま一里服りの
道と送ろせ別ま一ゞ尚日二個ハ長我新ろ二里

島五郎口論の中裁(さば)取来る証書を幸藏に見せる
島五郎
おつつ

幸藏

程隔ちし伊丹田と入る片山里なる幸義が子分猛実の種六が家より多り此家よりお勝を尚分乘託け其分は一先長我郡の我家より廢りて留ち中の伯父の用事を足さうもよ聖十一月は同國彩堀の十廉市まで此打は上総小総西國の郡義男女群集なし弥よ近郷笠喪なる觀世音の境内まで糸清人は引もきゝまを雑沓大方ならざるしうべこ天嘉居の際物商人而せくまで張並び賑き機関觀物ゆ

屋泥酒連茶文敬小所演奏或ひは傳演居合技人の眼と接く掏摸奪賊賣の内より大樹の蔭小山の禁より盆莚と命設けたる野田博奕樗蒲一なをべ丁半あり悪業仲間は雑と分ちく賊元毒振立番へ布繻の華鞦長脇差根藩者や乱狂人と威を獲衛の防だと初ゝ是彼水滸傳の梁山泊より天剛地慍の嘉傑が種ふも彩やと想像せり此一叔の盆莚より寺口と号け丁半の勝負と競ふ相方が賭たる金額の二十一の分

を元立て函に収め合して封紙得る者へ則ち長
我新の幸蔵なるが一昨年の十夜のとり伝物五
宮の熊次郎と一所不逸の悪漢が手新下と土間
連なて当新場の帝に来り傾元幸蔵に金を借ん
と強て迫りて賭博場を乱妨せしうべ幸蔵が子分等
一同寄集ひ彼熊次郎を切殺し新下の取手を追退
ぞけしが此事早くも傾元に聞えその罪幸蔵一己
に帰し虚と故郷に立ちべ忽ち捕へらるとんと推し

暫時江戸に潜伏居て二年余りを過しつ最寄乱
のさゝし頃と当年の十夜の賭場を目的に故郷に
帰り来りしへ其身の果と知られたり然べ又幸蔵
も我出地なるが法度を破る賭博の場所を旅
装ひに大刀ぶち込を一のみ分猫実の種吉初め雲河
の久次一の宮の次郎吉なども何れも名のある長脇
差と括袴よぶつ裂羽織大小佩たる武士打扮へ当
時江戸神田かまが池に真彩流の撃剣師千葉周作

ゞ二男同苗同之亟亂友とゝ名乗しゝ威しゝ連し
擬ひ者と雲妻か揚ゞ衣を」連立かの新婦の十兵衛
来り我貸元の賭場を巡りて盃莚毎ゝ眼と配り
犯常と防ぐ徒への指揮の最いうめしゝ扨しもなれ
一叢義る喪義ゝ空嘩ゝくと歩く声頃哉と撞六
久次ゝ吊古二個等しく其場とさして色ゝくち院の
背後ゝも再び元人の叫ぶ声へ地ゝ空嘩の起りしるらん
と幸義へ同之亟ゝか揚と付託を約ら其処ゝ行んと

る林の蔭ゝ数多の捕丁たゝ幸義ゞ茶後とゝ巻
上意くと呼るゝぞさてへ茶科の冬気ゞ拾りて我と
捕縛るの汁器るゝ去るゞゝ通るゝ丈い通れてえん
と左右ゝ細付く捕丁と分と捨ゝして突退潜退け腰
の一刀抜ゝ疾く水車のごく打揮る実既電光石火
の疾業ゝなりらひるゝて捕丁ゞ右左ゝ爾潴ふ主ゝ
一方の血路と開元米丁張ゝ一筋の小路とゝなゝぎ義切
途中機関の罠ゝ行足潜込と思いぎ撞と例ゝ伏ゝ配ん

とるを能しも立ぎ右左の穀蔭より七八個の捕丁の伏勢忽ち手足より跳り出打重りて幸蔵をぐるく巻き束縛つ為たる力を拾ひ紙縒より収めて囚人引立元の市場より引返さるよ此時幸蔵が子分ある種六又次郎右の三個も疾く捕縛是今幸蔵の捕ハ是て用ドまとゐよ入ーを縋やり互ひに面を見合ーて無念の眼血ぢーるのみ亦

仝術もなうなる

鋸山王石異訓初編巻上終

010190513039